

(秋の雑記) 高校の「大先輩」と「大後輩」について

森繁久彌(ときに「久弥」とも表記される)氏が亡くなったとの報道に接して、五十数年前の府立北野高校時代に母校の講堂でお話をうかがったことを思い出した。学校当局が招待した行事ではなく、彼が先輩として、たまたま母校にお寄りになった折り、そのお話を聞きたい生徒は昼休みの時間に講堂へのアナウンスがあったので、私も参加した。当時は、まだ今日のように大御所的な存在ではなかったけれども、既に有名ではあったから、講堂にはかなり多くの生徒たちが任意に集まっていた。

半世紀以上も前のことなので、お話の詳細は忘れたが、「自殺してはいけない」との趣旨を熱心に伝えようとなさっていたことだけは明確に覚えている。というのも、昭和 20 年代に、何人もの在校生が自殺し、関西では一般の新聞でも、かなり大きく報道されていたため、北野を受けると言う、「それはいいけど、自殺したらアカンよ」などと真顔で心配されたりする時代背景があったのである。

森繁さんは、後輩のそのような状況を憂えて、既に売れっ子で大変お忙しい身であったろうに、母校まで足を運び、後輩である私たちに語りかけられたわけである。そのお話の効果かどうかは別として、私の同級生や近い学年の後輩たちから自殺者が出たという話は聞いていない。

さて、30 年近く前の「大先輩」の話を書いているうちに、連想が 30 年ほど後の「大後輩」に及んだので、事柄としての関連性はないが、そちらに話題を移したい。

20 年ほど前の東京での同期会の席で、北野のラグビー部が花園への出場を決めたことが話題となった。戦後間もなくには、甲子園で優勝したこともある母校だが、絶えて久しく甲子園や花園に出場することはなかったので、記憶の端に残った。最近になって、この記憶を思い出させたのが、橋下徹氏の大阪府知事への立候補であった。彼は、北野ラグビー部の一員として花園に出たのみならず、そこで華々しい活躍をしたというではないか。

そのエピソードもプラスになったのか、彼は当選し、政治の面でも大活躍を始めた。これまで、大阪府知事などといっても、関西ではともかく、全国的にはほとんど影響力を持たなかったのに、彼は全くちがう。その主張に対する賛否は別として、その発信力は大きく、今日では国政にさえ、かなりな影響を及ぼしている。

「大先輩」という言葉は日常的に使われるけれども、「大後輩」という言葉は普通ないが、対になって面白いと思い、敢えて造語してみた次第である。

戦後間もなくの頃に、内閣総理大臣を務められた幣原喜重郎氏という先輩をはじめとして、各界各分野でたくさんの先輩、後輩が活躍してこられたし、現に活躍しておられるが、現在ただ今の時点で「多くの人に知られている」という観点だけから判断すると、森繁久彌氏と橋下徹氏が、母校同窓生の双壁ではないかなあと思ったので、ここに両氏を「大先輩」「大後輩」として並べて取り上げた次第である(「事業仕分け」のネット中継を聞きながら、「いつも政治評論ばかりでは」と思い、文字どおりの「雑記」を記してみた)。